

旧丹野家住宅

ミドリ 「今日は久しぶりに^{ならげ}櫓下ね。」
あゆむ 「そうだね。あれ、でもここをまっすぐ行けば、金山峠の方に行くんじゃないか？」
ふみお 「“旧丹野家住宅”は、下町から移されて、この道の途中にあったんだよね。」
ミドリ 「あれよ。外からは見ていたけど、中はくわしくは見ていなかったわ。」
あゆむ 「へえ。これまで通り過ぎていたんだ。よく見ると大きな建物だね。」

ミドリ 「説明板がある。」
ふみお 「“^{ならげしゅうらくす}櫓下集落図”や“^{たきざわやまどりす}滝沢屋間取り図”などもあってくわしくわかるね。」
ミドリ 「説明板に、“滝沢屋(旧丹野家)”と書いてあるわ。滝沢屋は、家の呼び名で、^{やごう}屋号だったわね。」
ふみお 「宝暦7年(1757)の洪水後に建てられて、

大学の調査でもそのころだと確かめられたとある。前は、この集落図の30番の家で、かどのところだったね。」

あゆむ 「あ、前に来た時の^{ちゅうしゃじょう}駐車場の向かい側のところだな。思い出したよ。」

ふみお 「^{したまち}下町や^{もとまち}本町とも言われた^{まちな}中心的な町並みで、^{ほんじん}本陣とか^{わきほんじん}脇本陣などがあったところということだったよね。」



「東北の秘境 上山・櫓下宿一斎藤茂吉生誕百年を偲んで」より

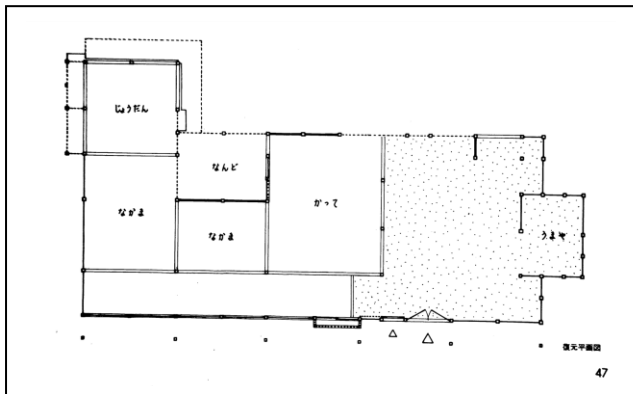
ミドリ 「そう、思い出したわ。^{とのきま}殿様が泊る本陣。次にえらい人たちが泊る脇本陣だったわね。そして、この滝沢屋は脇本陣。」

文じい 「ふむ、よく思い出した。滝沢屋の前の写真がある。わしも昔入らせてもらって、たくさんのかんざしやくしを見せてもらったものじゃ。案内人の木村さんがいらっしゃる。お話をお聞きましょう。」

あゆむ 「お、この戸をくぐって中にはいるんだな。なんかせまい感じだな。」

ミドリ 「毎日の出入りなら、これぐらいでいいんじゃない。」

あゆむ 「アッ、でも木村さんが戸をいじっている。
 おお、広く開けられるんだ！」
 ふみお 「中にうまやもあるし、広く使うときはこの
 ように開けられる。うまくつくってある。」
 文じい 「そうじゃのう。あとは間取り図にある通り
 に、木村さんの案内で見していこう。」



ミドリ 「じょうだんは、りっぱな部屋ね。それに、
 置いてあるものもなんかすごいものばかり
 みたいだわ。」

文じい 「まさにお宝びっしりじゃのう。」
 ふみお 「それに、展示されているものも、いろん
 なものがあるね。」
 文じい 「古文書に、絵図、旅の道具、関札など、大事
 な資料ばかりじゃ。それに、かんざし、こ
 うがい、くし。」
 あゆむ 「お、銭もあるぞ！」



文じい 「廊下は、幅の広い“広縁”になっている。そ
 して、板戸は持ち上げて開けられる“しとみ”
 じゃ。さらに、屋根が長く伸びた“土庇式”
 の“こまや”、まあ、ポーチじゃな。その柱
 を受ける横に渡している“桁”は、一本の木
 で13間(およそ23.5m)もあるという。」
 ふみお 「板戸は上に開けられる。雪もつもらない。」
 ミドリ 「すごい造りだわ。」
 文じい 「元の図面を見ると、“土間”の奥に“だいで
 ころ”、その続きに、“蔵”があった。」
 あゆむ 「もっと大きかったんだ！」
 文じい 「昔は、“滝沢諸白”という名のお酒もつくっ
 ていたという。」
 ふみお 「県の文化財に指定されるわけだ。」
 文じい 「ふむ、檜下は他にもある。また来よう。」

